

ベートーヴェン小噺。P — Anniversary 編 —

1835年、ボンにベートーヴェン像を建立する プロジェクトが発足した。来る生誕75年 (1845年)を記念したもので、フランツ・リスト が資金集めの立役者となる。シューマンも寄付 目的で幻想曲 ハ長調 Op.17を寄せ(1838 年、リストに献呈)、のちにメケッティ社による チャリティー楽譜[ベートーヴェン・アルバム] (1842年出版)にも掲載された。

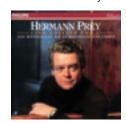
幻想曲の第1楽章コーダ、ベートーヴェンの連 作歌曲集「遙かなる恋人へ An die ferne Geliebte I終曲の旋律がしみじみと現れる。 シューマンにとっての"遙かなる恋人 die ferne Geliebte"は、当時ヴィークの妨害で会 えなくなっていた恋人クララその人だった。こ の場面は、ベートーヴェンへのオマージュであ ると同時に、愛するクララへの二重のメッセー ジになっている。

シューマンは一途で素朴なこの連作歌曲集を こよなく愛した。白眉は終曲「さあ受け取って くれ、かつて君に歌ったこの歌を1の終盤で、 初めて出会った牧場を回想する第1曲の旋律 が回帰するところ。ベートーヴェンは、駆り立 てるようなピアノを懐かしの旋律にマリアー ジュさせ、届かない憧れを高らかに謳い上げ



る。連作歌曲ならではの"回 想"の効果。シューマンは、 "歌の年"1840年、自身の連 作歌曲集「女の愛と生涯」「詩 人の恋!の終曲で、ピアノ後 奏による回想シーンをみごと に演出したが、この感動的な 場面には、ベートーヴェンが かつて開拓した手法が確か に息づいている。

おすすめCD Hermann Prey



「遙かなる恋人へ」には、ヘルマン・プラ イのあたたかいバリトンが不思議なほ どぴったり。語りすぎない純朴な歌ご ころが一途な恋と重なり合う。ピアノ はレナード・ホカンソン。一方シューマ ンの熱っぽく夢みるような世界に肉薄 しているのがカトリーヌ・コラールのピ アノ。音楽の体温は高いが、どことなく 曖昧さや浮遊感を伴う危うさが絶妙 で、幻想曲も好演。「女の愛と生涯」はエ リー・アメリンク&ダルトン・ボールド ウィン。「詩人の恋」には、シャルル・パ ンゼラ&アルフレッド・コルトーによる あまりにも幻想的な名演がある。



内藤 晃 ピアニスト. 指揮者、 作編曲家

月刊音楽現代にコラム「名曲の向こ う側lを連載。楽譜やCDの解説多 数。フランツ・リストのマスタークラ スの記録を翻訳出版予定。音楽の 奥深さや新しい楽しみ方をみなさ んと共有したいと願っています。 Twitter@Akira0404